

令和5年度 第2回桐生市青少年問題協議会 結果報告

日 時：令和6年2月14日（水）10：00～11：35

場 所：青年の家 講堂

出席者：小林一弘、園田基博、工藤英人、江原勝則（代：吉沢真一）、中村清、松島宏明、青柳明美、阿部誠二、上原敏行、上原清司、蛭間好江、周藤寛、白崎あつ子、青木講一、加藤秀幸、糸井近夫、高松富雄、鈴木智行、金子公江（学校教育課教育支援係）須藤恵理子、星野正史、金子秀明、下山秀人、新井礼子、岩沢誠典、木村裕一、岡田和久、岡戸隆也

<全体会>

- 1 開 会 司会：星野課長
- 2 挨拶 小林教育長
- 3 報 告

・桐生市いじめ防止対策として、桐生市教育委員会の取組（資料1）、桐生市教育委員会いじめ緊急対応マニュアル（資料2）、桐生市いじめ防止子ども会議（資料3）をもとに、いじめ防止対策の成果と課題について、鈴木教育支援室長、金子教育支援係長が報告した。

<質疑なし>

・「桐生市明るい家庭・地域づくり運動」推進市民大会について、岩沢主査が報告した。昨年度よりも参加人数を増やし、感染対策等を講じながらコンパクトな形で開催できた。推進標語、イメージ写真は、「明るい家庭・地域づくり」について考える機会として、市内の学校や幼・保育園、一般からの作品を募集し、優秀作品を表彰した。また、少年の主張の発表は、東毛地区大会で入賞した生徒も多く、大変興味深い内容で素晴らしかった。来年度以降、内容や参加人数等を青少年愛育運動推進会議にて検討する。

<質疑なし>

・令和5年度桐生市青少年問題協議会（第1回）で話し合われた内容等について各部長より報告した。

<質疑なし>

- 4 閉 会 司会：星野課長

<専門部会> 10:30～11:35

こども対策部会（4号室）

1 開 会 司会：星野課長

2 挨拶 松島部会長（青少愛会長）

3 協 議 <議長：松島部会長>

委員：前回の話し合いを振り返ると、コロナ禍の影響から3年経過し、5類移行による制限解除で少しずつ元の生活に戻りつつある。完全に戻っていない中で、各関係機関・団体等ができることからスタートしてきた。その中で見えにくい部分が多くなり、特にネットに関わる問題が多くなった。いじめ防止子ども会議ではいじめの背景にある SNS に関する話し合い、少年の主張では多岐にわたる問題提起を子どもたちから聞くことができた。問題解決の糸口の一つに、相談相手・場所が考えられる。家庭・地域対策部会では、逃げ場や連絡・相談窓口について話し合われた。本会議は多岐にわたる青少年問題に対して、2年間で計4回の話し合いが行われる。(今回が2回目)。前回に引き続き、青少年問題について話し合っていき、次年度（3回目）に引き継ぎたい。

委員：青少年の問題を解決するというよりは、多くの大人が青少年に関わり、「話を聞いてもらいたい」という子どもたちの欲求を満たしてあげることが大切。SNS においても承認欲求を満たされれば、問題が解決に向かうと考える。悪いことだとわかっているが、「自分の大変さをわかってほしい」という願望から SNS に投稿し、トラブルとなってしまう。その問題自体は解決しないことが多く、子どもたちの不安や不満を聞いてくれる相手（受け皿）があれば、SNS に投稿することも少なくなると思う。子どもたちの気持ちが安定しない限り、いくら指導をしても響かないと思う。

委員：生徒同士、親子関係で会話がしにくいような状況が見られるか。

委員：子どもたちが愚痴をこぼせない状況はある。コロナ禍や PTA の問題等において関わり合いが少なくなっているとは思う。

委員：小学生の中学年頃からスマホを所持し始める。情報モラル講習会だけでなく、青少年課職員によるインターネット研修を高学年児童に対して行った。SNS で他県の名前もわからない子（大人）とつながってしまう事案があった。保護者も本人もあまり危険性を感じていなかったため、急遽研修会を授業形式で行った。繰り返し、継続的に指導する必要性を感じる一方で、共働き家庭や核家族化の影響で家庭での会話が減り、コロナ禍や少子化で学校でも友達と話す機会も少なくなり、気の合う仲間が見つからない。さらに外出や交流がなくなれば、SNS が手軽につながるツールになるのは必然。SNS 上での繋がりが精神安定となってしまうと思う。

委員：駅前や新川公園のスケボー少年たちは外に出て、パワーがあり、自分たちの思いを蟻集する中で表現・共感できる（昔でいう不良タイプ）。一方、今の子は逆のタイプが多く、家の中で、思いを内に秘め、SNSの中で表現して共感を得る。蟻集するのは稀で、多くはSNSに依存しトラブルに巻き込まれるパターンがほとんどで、現状では使わせない指導はできない。正しい使い方を教えていく指導に変わっている。そこで「おりひめさま(案)」を作成した。最後は人と人が直接触れ合うことが重要で、SNSはあくまで手段として使い、学校で会って話すことがトラブルを防ぐことにもつながるといふ思いがある。たたき台として活用していただき、皆様のご意見を伺いながら作り上げていければよいと思う。

委員：青年の家も蟻集する子どもがいる。スケボーをしたくて集まっているので、反抗的な態度を取らず、話を聞いてもらいたい様子である。「どこでやればいいのか」、「やる場所がないからここにいる」等、言い分は伝わり、会話は成立する。徐々に喫煙する中学生を補導したが、外で迷惑行為をする青少年は少ない。また、広がる様子も見られない。

委員：スマホの所持を前提で使い方の指導をしている。最近の若者のコミュニケーションは一往復で終わると言われている。例えばメールで若者（部下）から『●●お願いできますか。』との依頼（メール）を受け、大人（上司）が『今回は、都合が悪くてできません。』と断りの返答をすると、ここで終わってしまう。大人の感覚ではもう一回（一往復半）『では、次回お願いします。』と続くと思っても、若者の意識として、断られた時点で完結している（次につながるコミュニケーションがない）。子どもたちの日常のわずかなやりとでも誤解を生みそうな場面が色々と考えられる。スマホ（SNS）の使い方の指導や日常会話の場を増やして人の話を聞くことを重要視している。本校ではスクールカウンセラーが活躍しているが、実際に解決しないこともある。時間が解決する内容も多いが、話をするのはとても大切。もちろん教諭も相談を聞くが生徒と近すぎて話せない内容もあるので、斜めの関係というか第三者の大人が聞いてくれる場面は必要だと感じる。ただ予算がかかることで教育委員会の力も必要になる。どうやって生徒に気持ちを吐き出させるかを保護者も悩んでいる。トラブルはゼロにならないと思うので、いかに早く掘み、早期対応をするかが重要。どんどんトラブルは増えていくと予想できる。大人も使わせるからには「トラブルがあっても当然」という意識をもって対応することが大きな変化となり、その結果、学校でも管理職への報告も早くなり、解決方法を組織で対応できる。子どもたちの会話の中で、知らないワード（アプリ）がどんどん出てきて、大人もついていけない。それだけ移り変わり（流行り）が早い。それだけSNSの世界は急速に普及している。

委員：スマホの問題は何かあれば学校が対応している状況であるが、スマホを買い与えているのは保護者であり、「おりひめさま(案)」の「お」にある親子でルールを決めることからしっかりスタートしないといけない（利用開始にあたって慎重に親子で話し合う）。そして最後はそのルールを守らせる。家庭の中では、保護者もスマホ

を利用している状況の中で、子どもだけが制限されるのは反発のもとになりやすい。親子で話し合いながら、ときには一緒に使う、やめる、使う時間や場面を決めるなど、コミュニケーションは重要。例えば、子どもの学校への送迎時に約30分間の話ができる時間・場があれば、何でも良いから話しかけてみる。兄弟でも性格が全然違うので、話をする機会を大事にしている。スマホは中学生から高校生の時期に与えた。ユーチューブやゲームに夢中になっているが、ダメとばかり言わずに、内容について話しかけたり、テスト前は控えるように促したり等、とにかく会話をするようにしている。親子の会話をどうするのかを考えていくことが重要だと思う。学校で生徒・保護者・教員と一緒に学ぶ場が必要。講演だけでなく、三者と一緒にスマホを使って学び、生徒から大人が学ぶのも良い。新しいものがどんどん出てきて大人がついていけないが、子どもの方が良く知っている現状で、同じ目線で話せる環境を作り、地域も含めてみんなで一緒に考えていけると良い。

委員：子どもたちの変化は感じる。ボーイスカウトでは、異年齢間で協力し、助け合いの中で活動するが、みんなお友達感覚で、集団での活動を好まない傾向がある。個としての活動が好き。ボーイスカウトの世界大会が韓国で開催された時にSNSが便利であると理解できた。一方でコロナやインフルエンザが流行し、確認を取るためにLINE等を活用すると、その情報が保護者等に拡がり、大きな騒ぎとなって大変だった。コロナ感染者を隔離して生活させたことに対しても色々な意見が出て、非常に難しかった。便利な一方で情報の拡散から別の問題を引き起こすこともある。保護者も状況判断をきちんと行わずに情報発信をしている状況があると感じた。事実が正しく伝わらない、伝えても誤解や別の解釈を生み出す危険性を痛感した。

委員：不登校の子どもが多いのが心配。原因の一つに保護者が共働きで、家に一人残されている状況がある。親が仕事に行ってしまう間、子どもは自由になり、学校へ行かず、家でゲームしたり遊んだりしている。保護者が在宅している時間帯に家庭訪問が出来たらと考えている。子どもが自分の判断で登校せず、保護者は帰宅後にその事実を聞き、登校しなかったことにあまり危機感や不安を感じていない家庭も多くなっている。親がなぜ仕事をしているのか（子どもたちの生活を守るため）を子どもたちに十分理解させる必要がある。不登校を理由に巡回はしないが、子どもの様子、家庭環境等を確認するために家庭訪問等を実施したい。子どもたちも、わがままが通ることに慣れて、自分勝手になっている。不登校で家にいる間もお手伝いやできる家事等をするわけでもなく、好きなことをしながら母親の帰りを待ち、帰宅後に食事を作ってもらって当然のように食べている。いじめが原因で不登校になってしまったのであれば対応も考えられるが、自分の好きなことをするために不登校という場合、家庭訪問をすべきなのか迷ってしまう。このままでは現状が変わらないので、親子で話し合いをする場面を設定するためにも、対策を考え、親子関係の修復に力を注ぎたい。

委員：子どもの変化だけでなく保護者の変化、家庭環境の変化、親子の問題、ゲームや SNS の危険性、家庭での問題や危険性が学校や地域へ発展していく問題等、多岐にわたる問題がある。新しいことをやるのではなく、できることを一つずつ取り組んでいく必要がある。各関係機関や団体の垣根を越えて取り組んでいかなければ、子どもたちに届かない時代になってきた。

委員：学校適正規模適正配置の話が進んでいるが、子どもたち同士の距離感、PTA 再統合の問題、社会的にコミュニケーションを取ることに問題が多い。問題解決を私たちの善意に頼った対策は限界がある。条例を作り、それを守るために保護者や学校がどうすべきかを進める中で、ネットの使い方やおりひめさま(案)を作成していく等の動きが起こり、社会全体で子どもを支えていく土台を作りたい。

委員：親子の関係性が重要。子どもに自由に何でもさせてあげることと放任との違いを明確にして、条例等ができると思う。「地域の子どもは 地域で守り 育てる」というスローガンのもと、各家庭で子どもを育てるなかで新しいものばかりに目を向けるのではなく、今まであった大切なものを見失わないように私たちが伝えていく必要はある。

委員：いじめ防止子ども会議に出席して、中央中の「サンキューツリー」という取り組みがあり、いろいろなサンキュー（ありがとう）を葉の形の付箋に書いて、模造紙に書いた木（枝）に葉（ありがとうの言葉）を貼り、いっぱいにしていくといった内容だった。これでいじめがなくなるかどうかかわからないが、前向きな手法で良かった。子どもから SNS について大人が学ぶこと、条例の設定から子どもの権利を考える、おりひめさま（案）からネット見守り活動に関する啓発等、色々な方策が出されたことに大変意味がある。桐生市青少年問題協議会は市の青少年問題に関する最高機関であり、その中で常に議論され出された案を形にしなが実現していくことで、子どもたちの環境を整えることが本会議の趣旨。提言・答申してきた時代、ポスター作成した時代、常に協議し続けている時代。決定打があれば、それをやれば良いがなかなかない。しかし、常に何かの手立てを考える必要がある。

委員：おりひめさま（案）は保護者へのメッセージも含まれていると感じる。今回の会議の中でも保護者の変化や家庭の問題について話されていた。外食する家族を例にとると、家族4人が各自スマホをいじって会話をしない様子を当たり前のように目にする（違和感もなくなりつつある）。おりひめさま（案）を通して、親子関係を考えるきっかけになると思う。スマホを持たせているのは保護者であり、保護者も再度使い方等を考えてもらいたい。おりひめさま（案）の「また明日、学校で話そうね」の一文は、学校の在り方や学校はスマホでなく生で話す場面であると再認識できた。

委員：今後とも継続していく。

委員：子ども対策部会で子ども中心の話合いをしているが、大人も SNS で誹謗中傷を受けたり、トラブルに巻き込まれたりする可能性がある。学校でも保護者や先生が嫌な思いをすることもある。子どもに関わる立場である皆さんの言動は周りへの影響が

あるので十分に気をつけてほしい。地域の方が、善意でちょっと声をかけることも難しい時代になってきていると感じる。

4 閉会 司会：星野課長

家庭・地域対策部会（2号室）

1 開 会 司会：金子係長

2 挨拶 青柳部会長（青少愛副会長）

3 協 議 <議長：青柳部会長>

委員：日頃より青少年に関わる活動にご尽力いただいている皆さんから、様々なご意見を頂ける貴重な機会。各関係機関や団体の中で感じている問題や青少年の状況、対策等、それぞれの立場からお話いただき、活発な議論を重ねながら充実した部会にしていきたい。

委員：第15区では青少愛10団体会議を年3回実施している。参加団体は、補導委員会、少年補導委員会、民生児童委員協議会、子ども会育成連絡協議会、保護司会、相生幼稚園、相生小学校、天沼小学校、相生中学校の9団体（以前は10団体だった）。子どもたちの生活や学校の様子等について情報交換や共通理解を図り、各団体で連携して、明るい地域づくりに努めている。また、防犯パトロールを町会ごとに当番制で毎日実施している（3人1組）。昨年5月から新型コロナウイルス感染症の行動制限が解除されたが、たまり場や問題行動に関する報告はほとんどない。

委員：10団体会議には補導連の代表として参加しているが、小中学校からの報告では、ほとんど問題行動はない。パトロールしていても子どもたちをあまり見かけない状況で、落ち着いている。

委員：今年は大間々まつり（8月1日～3日）と桐生まつり（8月4日～6日）が連続で開催された。桐生まつりでは、4日に小さなトラブルがあったが、全体を通して青少年に関する大きな問題はなかった。市の協力もあり、本町5丁目交差点の出店を控えてもらったことで、混雑が緩和された。時間的にも予定通り終了したことは大変良かった。今はSNSを通して面識はないが何となく知っている者同士が、他市から地元（桐生）へ来ることに対して、ぶつかることがある。SNSで繋がった仲間同士でトラブルが起きやすい。

委員：桐生市補導連も桐生まつりの特別パトロールを実施した。5丁目の交差点を避け、裏通りを歩きながら巡回した。青少年の問題行動は見られなかった。

委員：報道等で空き巣の被害について知ったことで、住民として不安が高まった。今回は学童の近くで、子どもたちの安全についても心配があり、保護者も不安であった。学童としても防犯カメラや門の施錠等で対策は取っている。

委員：薬物乱用防止教室を今年度は、中学校でも開催した（例年は小学校のみ）。小学校では、「たばこの害をゼロに」と題し、たばこが心身に与える害についてクイズを交えて行った。中学校では「依存」をテーマに、スマホ依存だけでなく、不登校の問題等も人間関係の希薄さや距離感が関係していると考え、依存する経緯や依存の怖さ、そして自己コントロールする力を身につけてほしいと伝えている（喫煙の問題も合わせて話をした）。子どもたちの感想を見ると、私たちの想像以上に依存や薬物の怖さを理解していて驚いている。3団体（事業主会・保護司会・更生保護女性会）で連携して今後も啓発活動を行っていきたい。

（来年度は、東毛5市の啓発活動が桐生市で開催）県から栞人形の配付が中止され、代わりにファイルを配付し、子どもたちが困った時に頼る連絡先（子どもホットライン）を掲載した。

委員：対象学年は。

委員：対象学年は小学6年生。反抗期・思春期の中学生になってからではなく、たばこや様々な依存等に関しても、純粋に楽しんで聞いてくれる小学生から始めている。（たばこクイズなどの反応も良い）中学生は2～3年生対象。日頃はあまり話を聞いてくれない生徒（いわゆるヤンチャな子）も、薬物乱用教室では真剣に聞いていて、アンケートもしっかり答えてくれた。事前事後アンケートを実施して、結果的には意識の変化も高まっている。

委員：中学2年生はどの学校でも話をよく聞いてくれる。押し付けるような話ではなく、質問して生徒に投げかけるような話し方をすると真剣に伝えてくれる。薬物に関しては、低年齢化が進んでいる。小学生も効果はあるが、中学生の方がより身近で現実的であるため効果が高いと思う。

委員：資料を見させてもらい、薬物乱用に関しては個人情報保護や人権尊重の立場からも名前を挙げることは難しい。有名人はニュース等で取り上げられ、更生した人も多い中、一般の方でも更生し社会復帰した人もいる。また、すぐに戻ってしまう人もいる。その例を挙げることは可能であるか。

委員：薬物依存は、再犯率が高いのが薬物に関する事案。施設では、NPO 法人日本ダルク（東京都）があり、薬物からの回復プログラムを行っているが、習慣化している薬物依存は、立ち直るのはかなり難しい。突如リバウンドし、手を出してしまう。

委員：真面目に取り組み、社会復帰した人も多くいる。藤岡に施設（ダルク）があり、研修を受けた時に感じたことは、元に戻るのがとても難しいということ。

- 委員：更生保護女性会では、小さい頃から薬物乱用防止教室（たばこの害）を実施し、「絶対に手を出さない」ことを伝えている。
- 委員：子どもたちが人との交流を求めている中で、子どもの考えや思いに寄り添った対応が求められている。前回、話題になった発達障害の保護者に対する相談場所についての状況は。
- 委員：子どもホットラインで相談が多いのがスマホの問題と発達障害。発達障害をもった親が子育てできないとSOSを出している。桐生市で受け皿を探しているが、なかなか見つからない。放課後デイサービス等の施設も増えている。保護者には様々な関係機関を紹介し、相談し、保護者が学ぶことを勧めている。自分の子どもへの対応、育て方に少しずつ自信をもてるように、保護者へも話をしていく。
- 委員：育てにくさを感じている親御さんに対しては、今年度から「子育てメンター事業」を開催し、月1回（令和5年9月～令和6年2月で計6回）メンター研修として、同じ悩みを持った人や経験者と相談・共感し合う場を設定した。座談会型で悩みを聞いてもらい、心を軽くする機会に。地区の公民館で開催。来年度も継続する予定。広報（QRコード付）等でお知らせ。これまで開催して、5・6名の母親が参加。相談窓口は子育て相談課で対応している。
- 委員：学校での発達障害児童・生徒への対応はどうなっているのか。生徒の発達障害、担任の先生等の対応は。
- 委員：学校へは、メンター事業のリーフレットを配付し、児童生徒から保護者へ渡るように考えている。
- 委員：先生から保護者へ関係機関や相談窓口を紹介するのも良い。更生保護女性会や関係機関へ相談するのはハードルが高く、躊躇してしまう可能性がある。
- 委員：学校から子育て相談課へつないでもらうことも考えている。
- 委員：相生地区青少愛10団体会議で、発達障害に関する報告はない。
- 委員：子どもホットラインは、それほどハードルは高くない。多いときは一晩12件の連絡がある。保護者の行き詰った感や小言を聞いてくれる場として機能している。地域に助けてもらえる場所がわかれば頼りたいが、たどり着くまでに時間がかかってしまう。一方で知っていても連絡することに躊躇してしまうケースもある。
- 委員：子どもホットライン等の連絡先は、自分で調べるのか。
- 委員：ネットでも調べられるし、名刺サイズの連絡先を学校から配付されたりしている。保護者で病んでいる方は、夜中に連絡して1時間近く話をする中で精神安定を図っている。無料であるため、利用している人に有効な手段。アドバイスを求めずただ聞いてくれるだけで十分。
- 委員：保護者の安定が子どもの成長に良い影響を与える。親が不安定であれば、子どもは敏感に察知して、本来話したいことを言わなかったり、甘えたいところを我慢したりしてしまう。

委員：SNS で繋がっている相手は、遠い場所に住んでいて、そこで虐待されている体験談を語る場合もある。

委員：市でも「子育て生き生きガイド」のように、各世代別に対応できるように冊子等を用意し、誰でも手に取れるように対策をしているが、市民に周知されていないようで、知らない人も多い。学校等を通して、紹介してもらうことで子育てに悩んでいる家庭の一助になればと感じる。

委員：可能であれば、母子家庭だけでも届くと良い。

委員：様々な手続等で窓口に来る方には、自然と手に触れられるように工夫はしているが、市とつながりがない方への情報提供は難しい。(桐生駅前) 保健福祉会館が子どもに関することについて対応しているので、とりあえず保健福祉会館へ行くことを、紹介してもらえると、対応ができると思う。

委員：警察も様々な相談に対応していただき、夫婦喧嘩で連絡があっても、迅速に対応していただいた等の話を聞いているが、警察にお願いできることはあるのか。

委員：警察署は何かあれば相談していただければ対応している。たかが夫婦喧嘩と言え、もし相談せずに最悪のケースになる場合も考えられる。こんなことぐらいだと相談することを躊躇するのではなく、相談してほしい。最悪、配偶者を逮捕する可能性もあるが、犯罪を未然に、最小限に食い止める手段としての相談をしていきたい。住民の不安を少しでもなくしていきたいとも考える。

委員：必要なことや実現可能なことは市へ提言していきたい。案内や周知の問題は、できれば毎戸配付が良い。予算がかかる問題はあるがプッシュ型でどんどん配信していきたいと思う。SNS に関する問題については、様々な場面で議論される。傾向として、男子はゲームやアダルトサイト等利用による架空請求被害、X (旧ツイッター) でグループを作り、グループ同士の喧嘩やトラブルが多い。女子もSNS でグループを作り、友達や異性とつながり、最終的には会いに行き性犯罪・性被害にあうケースが多い。警察庁発表のデータ (R 元年～R 4 年) によると、18歳未満の女性の性被害者数は、R 元年が1754人、R 2 年が1531人、R 3 年が1504人、R 4 年が1461人。人数は減少傾向にあるが、SNS に関わる被害は増加している。小学2年生も被害にあう事案もあり、低年齢化。ネット見守り活動でも以前よりも発見しにくくなっている。警察に検挙されて事情聴取等で後から発見された事案が多く、表に出ているのは氷山の一角。理想は、被害者が相談できる場所が地域にあれば良いが難しい。基本は家族に相談できるような環境が重要。しかし、家族に相談できる家庭では問題は起こりにくい。相談できない家庭に問題が多い。

委員：地域の繋がり、家族の繋がり重要。小学1年生にお祝い金を地区から渡したい中で、個人情報保護の問題で詳しくわからず、地域が歩み寄っても壁がある。なかなか問題が解決する答えを出すことは難しいが、色々な意見が交わされ、それぞれの立場で青少年の状況を見守りながら、また次回の会議で情報共有ができることが大事だと思う。

委員：教育長が話された桐生市の少子化問題、SNS、発達障害、DV も含めて青少年の問題が多岐に広がっている。日本の人口が1.2億人いるが、一気に減少する。日本の経済が停滞する問題がある。日本の宝の子どもたちをしっかりと育てるのも大人の大事な役目。

4 閉 会 司会：金子係長